安積の歴史シリーズ

第36回　近代　軍都郡山と空襲

柳田　和久（やなぎだ　かずひさ）
郡山市文化財保護審議会
委員

軍都郡山

郡山市は、昭和19年（1944）１月に軍都（ぐんと）に指定された。軍都とは、軍隊や飛行場等の軍事施設を有する都市のことである。郡山には軍都に指定される以前に、すでに軍隊が駐留し飛行場が建設されていた。

郡山市や経済界は、軍隊の駐留や飛行場の建設に向けて、積極的に国に働きかけていた。

橋本万右衛門は、昭和12年（1937）に、フランスに滞在していた時から親交があった陸軍少将前田利為宅を訪ね、軍備拡張のおりには是非郡山にと懇願した。また翌13年の紀元節の日には、第２師団（仙台市）の将校２名が橋本万右衛門宅を訪問した。さらに、同15年３月には日東紡第３工場の西部、および北部の地を候補地に挙げるなど軍隊の駐留が具体的になり、万右衛門を中心とする開成社は、用地32町歩余（希望ケ丘や元国立病院辺）を献納し軍隊駐留の場所が決まった。その他、富田に兵舎・病院等を、片平に訓練場を、大槻に射撃場を建設するため約71町歩の土地を寄進した。

これにより、昭和16年８月７日から笠原政彦中佐を部隊長とする東部第66部隊が郡山に駐留した。同18年９月に第66部隊が会津若松に移動すると、その後に宮城県岩沼市から、東部第111部隊が移り駐留した。

軍隊の駐留の他に、郡山に海軍の飛行場が建設された。第１飛行場（郡山第１海軍航空隊）・第２飛行場（郡山第２海軍航空隊）・第３飛行場（郡山第３海軍航空隊）である。

海軍省は飛行場を福島県内に建設すべく調査していた。郡山市では昭和14年に大島・庚坦原・川田・早稲原・境伝左衛門・金屋等を案内した。昭和16年７月に福島市よりも郡山市が適地であるとし、17年２月に第１飛行場を田村町の徳定、第２飛行場を田村町の金屋、第３飛行場を安積郡大槻町と決定した。

さらに、東部第66部隊や東部第111部隊と、第１飛行場・第２飛行場・第３飛行場等の軍事施設

や軍需工場を結ぶ２本の道路を建設した。１本は安積橋（逢瀬川に架かる旧国道の橋）南側から上亀田まで、１本は金山橋（阿武隈川に架かる49号線の橋）から開成山までの道路である。金山橋から開成山の道路は幅11m、長さ3,350m。安積橋南側から上亀田の道路は幅８m、長さ400mである。金山橋から開成山までの道路は現在の49号線として、安積橋南側から上亀田の道路は、現在も軍用道路（うねめ通り）と呼ばれ利用されている。

軍需工場

軍需工場とは、戦争に必要な兵器・爆薬・飛行機の部品やパラシュート等の軍需物資を製造している工場のことである。郡山の工場も民需物資から軍需物資の生産に転換していった。

主な工場に、保土ケ谷化学・三菱電機・日東紡第１工場・日東紡第２工場・日東紡第３工場・日東紡富久山工場・東北振興アルミニューム・浜津鉄工所等があげられる。

保土ケ谷化学は、ガソリンのオクタン価を増加する研究と生産であったようで、四エチル鉛といわれる航空燃料を生産する軍需工場である。その他に爆薬の資材も製造していたようである。

日東紡第３工場は、昭和19年に中島飛行機株式会社に接収され飛行機の部品製造を始めた。翌20年の終戦によって日東紡に返還されたが、21年にパラマント硝子工業株式会社となった。

日東紡富久山工場は、ステーブルファイバー・ロックウール（スフと略す）生産のため、昭和12年に創設された。ガラス・岩石を繊維化し織物にする新産業工場である。スフ製造には、原料パルプに化学的な処理を施こし、人絹用パルプに転換するため硫酸などの化学薬品を多量に使用した。スフは海軍軍服の紺サージの原綿工場であったため海軍の監督下に置かれた。

東北振興アルミニュームは、同12年に創設された。東北振興アルミニューム株式会社と日満アルミニューム株式会社が合同出資したもので、日満アルミ富山工場で作られたアルミナ（アルミニュームの素材）を電解作業によってアルミニュームに仕上げるのが主な仕事である。アルミニュームは飛行機の部品等に使用された。工場建設にあたって、福島市と郡山市が誘致運動したが、電気分解に必要な電力の供給が容易な郡山市に決定した。

昭和18年創業の三菱電機は、軍需工場の指定を受けて飛行機の部品とパラシュートや風船爆弾を製造した。風船爆弾は季節風に載せてアメリカ本土まで飛ばし空爆するためのものである。

松葉製糸は、日東紡第３工場と同様に飛行機製造会社に接収され松葉飛行機と改称した。20年４月から飛行機の部品を始めたが、４カ月後には終戦となった。

山桜酒造は、軍需用のアルコールを製造しており、軍都に指定されると多くの工場では、民需物資から軍需物資を生産するようになったのである。

郡山の空襲

昭和20年（1945）に入ると、東京をはじめ主要都市が連日のようにアメリカ空軍の爆撃を受けるようになった。同年８月６日には広島に、３日後の９日には長崎に原子爆弾が投下され、日本は８月15日に無条件降伏した。

郡山は、昭和20年の４月12日、７月10日と29日に、８月９日と10日に爆撃を受けた。

４月12日は、B29が10数機ずつ編隊を組み３、４回にわたり爆撃した。目標は郡山駅と保土ケ谷化学・東北振興アルミニューム、日東紡富久山工場等で、鉄道と軍需工場と郡山駅前の北町や方八町、横塚等が爆撃され多くの人々が爆死した。

日東紡富久山工場では死者121名、重傷者27名を出した。保土ケ谷化学では156人、東北振興ア

ルミニュームでは43人、浜津鉄工場では６人が死亡した。このうちには、勤労動員として保土ケ谷化学で働いていた白河高等女学校の生徒14名、安積中学校の生徒６名、郡山商業学校の生徒６名、安積高等女学校の生徒２名、相馬工業の生徒１名の合計29名が犠牲となった。

７月10日は、グラマン戦闘機15機が機銃で軍事施設を攻撃した。同月29日はＢ29２機による爆撃で、郡山駅をはじめ駅西側の日東紡第１工場、日東紡第２工場、日東紡第３工場、三菱電気等の軍需工場や、その付近の民家等も爆撃された。郡山駅の空爆により多くの死傷者が出た。

８月は９日・10日と２度爆撃された。９日は、グラマン機99機により、軍事施設と鉄道の攻撃である。鉄道は郡山駅をはじめ、須賀川・矢吹・守山・三春・大越・船引駅等である。軍事物資の輸送手段を破壊したのである。大越駅では客車が銃撃され、乗客３人が即死、17名が重軽傷を負った。

８月10日は、福島県沖に進出してきた大機動部隊からの艦載機によるもので、午前と午後の２度にわたり爆撃された。午前は、グラマン機65機が軍事施設や第３飛行場（大槻飛行場）を銃撃した。午後は、120機が３梯団に分かれ来襲した。攻撃目標は、第１飛行場・第２飛行場の軍事施設や変電所・専売局・日東紡第３工場等で、日東紡第３工場や変電所は灰燼となった。

第１飛行場・第２飛行場は８月９日・10日に２度攻撃され、飛行機をはじめ格納庫や倉庫・兵舎が破壊され、僅かに第２飛行場の兵舎が残ったのみであった。また、酒蓋池・荒池・池ノ台の民家等にも爆弾を投下し、さらに金屋村や御館村の民家も焼失した。

アメリカ軍の爆撃は、郡山駅や飛行場、保土ケ谷化学・日東紡富久山工場等で、軍事施設・軍需工場や軍需物資を運ぶ鉄道を破壊したのである。

学生の勤労動員

昭和18年頃から敗戦の色が濃くなると、政府は召集令状を出し、兵役経験のない国民まで戦場に駆り出した。そのため、工場で働く労働者は不足した。それを補うため学生が軍需工場に動員された。

郡山市内の学校では、安積中学校（現安積高等学校）は保土ケ谷化学に、郡山商業学校（現郡山商業高等学校）は保土ケ谷化学や国有鉄道仙台郡山工場（工機部）へ、安積高等女学校（現黎明高等学校）は保土ケ谷化学や日東紡績・日本化学へ、郡山淑徳女学校（現郡山東高等学校）は三菱電機・国有鉄道仙台郡山工場へ、桃見台国民学校高等科は保土ケ谷化学・浜津鉄工場へ動員された。

郡山には東北大学、米沢工業専門学校や、白河

第１表　軍需工場と学徒動員学校名

工　場　名	学　校　名
保土ケ谷化学	安積中学校
	郡山商業高校
	郡山工業学校
	安積高等女学校
	桃見台国民学校
	東北大学
	米沢工業専門学校
	白河高等女学校
	相馬工業学校
国有鉄道仙台　郡山工場	郡山商業学校
	郡山工業学校
	郡山高等女学校
日東紡	安積高等女学校
日本化学	安積高等女学校
	三春高等女学校
三菱電機	郡山高等女学校
	棚倉高等女学校
飛行場建設（石川郡滑津村）	安積中学校
地下工場建設（安積郡熱海町）	
東洋電機（横浜）	
日本電解（横浜）	
京三製作所（横浜）	
共立製作所（川崎）	

『郡山市史』５近代（下）538頁

高等女学校（現白河旭高等学校）、相馬工業学校の生徒等、県内外の生徒も動員させられた。

郡山工業高校は、昭和19年に開校したが校舎がなかった。そのため、同年５月に保土ケ谷化学で開校式を行い、12月から化学科110名は同工場に、機械科55名は国有鉄道仙台郡山工場へ、それぞれ実習という形で動員された。また、安積高等女学校では、３年生の１組は日本化学、２組から４組は保土ケ谷化学に、５組は日東紡第３工場にとクラスごとに動員された。

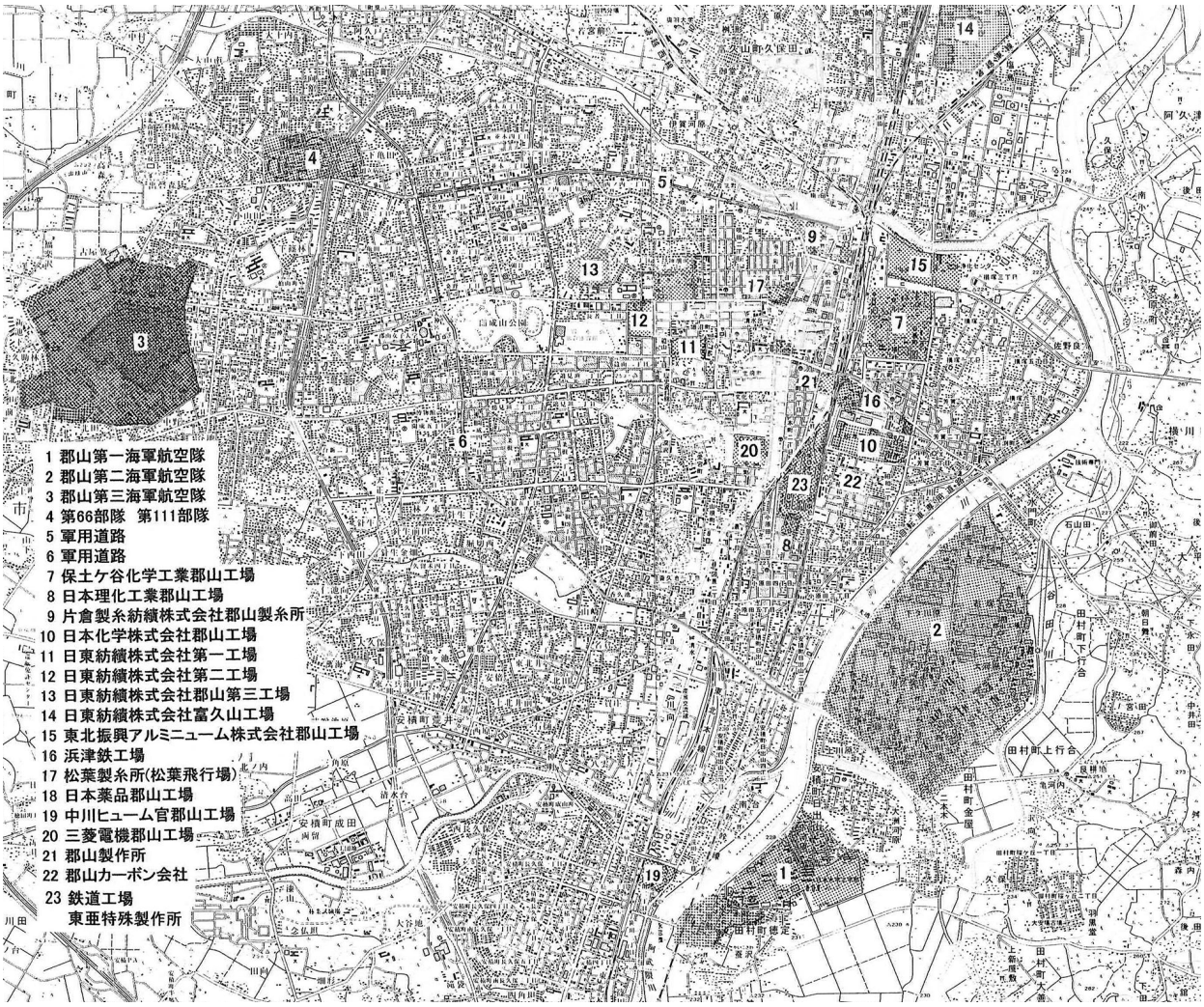
さらに、安積中学校の生徒のなかには、横浜市の東洋電機・日本電解・京三製作所や、川崎市の共立製作所に動員された学生もいた。

保土ケ谷化学に動員された学生が空爆により死亡したのである。

このように、郡山市や経済界は、軍隊の駐留や、飛行場の建設、軍用道路の建設、軍都の指定を積極的に進め、主な工場も民需物資から軍需物資の生産に転換した。そのため、４月と７月は軍需工場、８月は軍事施設が、空爆され534人が死亡した。福島県内で最も多くの犠牲者を出したのである。

註

『郡山市史』５近代（下）・『郡山市史』６現代



第１図　軍事施設と主な工場